



関西学院同窓会 大阪支部

INTERVIEW

<http://www.kwangaku-osaka.org>

2015.02

探訪記

FILE

No.03

ミズノ株式会社 代表取締役社長 水野 明人氏

スポーツが人生に果たす役割

——そもそもスポーツが人類に対して果たしている役割とは何だとお感じでしょうか？

スポーツというものは、その語源からあるように「遊び」からきているらしいですね。もちろん勝敗がありますので、戦いという面もあるのですが、そもそも人々が楽しむことを目的に行なう。それがスポーツの目的・役割なのではないかと思えます。スポーツの起源についてはよく分かりませんが、単純にかけっこをして勝敗を楽しむ。そんな人間の自然な行為が感覚的にも現代に引き継がれているのでしよう。例えば色々な報道番組でも戦争・殺人・深刻な政治問題や災害といった報道をしているときはキヤスターも厳しい顔をして話をしています。

すが、「ではここからはスポーツです」と言った瞬間に笑顔になり、語調も明るくなるでしょう。あれがスポーツが持つ魅力なんじゃないですか。

——「楽しみ」というスポーツの役割。それは高齢化の進む日本においても、個々の人生を彩る上で大きな役割を果たす可能性は高いのではないのでしょうか？

「存知のとおり漠然とした不安のために、お金をためてきたという高齢者層は少なくありません。健康を損ねてしまい、外出もできない——でもお金はたまっているという状態では、楽しいはずはないでしょう。やはり「Quality of life」：健康で楽しく過せるということが、充実した人生の前提条件となるわけでしょう。

高齢者の方々にとってもっとも大事なテーマは「どうやって老後を楽しんで過ごそうか」ではないですが、その前に健康でなくてはならない。スポーツはそこ大いに寄与するものですから、換言すれば「スポーツ」という概念と役割は多様化して

いくのでしょうか。競技を楽しむ「スポーツ」という面もあれば、健康を維持するための「スポーツ」という面もまたある。原義的にも、また生活環境の変化の奥にもある幅広い「楽しみ」をサポートするという意味を持つでしょうね。

——「人生を最後まで楽しんでいこう」という発想は、寿命の延びた近年の考えであると言えるのでしょうか？

それはそうでしょう。食糧事情の変化で栄養バランスなどを考えたり、生活環境が衛生的に向上したり…色々な要素が平均寿命を上げたことは事実ですね。同時に健康寿命※1も延びていっている。実際にアクティブな老人が増え、筋力も上がり、文化的な生活を送っておられる。スポーツを楽しむ機会は、我々の幼少期の老人よりもずっと増えているわけですからね。

そういった意味では色々な年齢層が出場する「ワールドマスターズゲームズ」(※2)といった競技会は象徴的だと言えらると思います。2021年には関西で開催され、また日本スポーツマスターズ2も様々な世代が出場できる大会です。ただ現代の30代は、スポーツの世界でも実際には現役世代なので「マスターズ」と言っても良いかどうかは議論の余地がありますが、それはともかく、70代、80代、90代…100を超えた人もスポーツを楽しんでいることが増えてきているように思えます。スポーツにもとめることが幅広くなっていく背景は、やはり近年の健康寿命の延びにあるのだといえるでしょう。

——スポーツの役割が多様化する中で、スポーツ用品の持つ役割というのも随分変化してゆくのではありませんか？

もちろんトップアスリートには、最高のパフォーマンスを導き出せる商品を提供することが大切ですね。100分の1秒を争う時に、少しでも早く走れるシューズなど。そのために様々な技術革新とか、クラフトマンシップ(※3)などが、そういった方面の研究は欠かせないでしょう。ただトップ



ミズノ株式会社

代表取締役社長 水野 明人 (みずの・あきと) 氏

アスリートはほんの一握りの人たちですから、彼らにターゲットを絞っていたのでは商売にはなりません。一般の方々への商売も一方で開発をしなければいけません。

トップアスリート用に開発したものをそのまま一般の方に使ってもらって、最高の能力を引き出せるか…といえは、そんなことはありません。例えばPGAツアーで最も飛ばす選手の使っているゴルフクラブを私が使ったとしたら、シャフトが硬過ぎるなど通常よりもっと飛ばなくなるでしょう。であれば、一般の方向けにはトップアスリート用の開発データから落とし込んだ普及品を開発する必要があります。なぜならば、トップアスリートの研究結果から一般向けのものを作るデータを導き出すことは、トップアスリート用の開発に比べると比較的容易なんです。一般のデータをそれほど集積しても究極を生み出すことは出来ないのですが、究極から一般は導き出せる—そういう意味でトップアスリート用の研究というのは、商開発の上でもとても重要な要素になってくるんです。

また同時に顕著な時代の変化としては、一般向けであってもオーダーメイド化がかなり進んでいるということですね。同じ規格のものを大量に生産するという考えを一方に持ちつつ、少し値段は上がるのですが個々に合ったものを提供する…特にゴルフはここ10年くらいで「カスタム化」がかなり浸透してきていますよ。その背景にはコンピュータITの発達があります。クラブを振ってものによってそれを計測するだけで「あなたにあったクラブはこれです」ということが分かる…昔はそうはいきませんからね。色々試してみても「やっぱりこれが良いですね」という感じ（笑）。「帰納的」であるだけに豊富な経験が必要とする分、時間もかかりますね。蓄積されたデータをもとに割り出す…「演繹的」と言うべきでしょうか。簡単に割り出せることがカスタム化をより進めているわけですね。

——データが導き出す「カスタム化」は、かなり精度が高いのでしょうか？

多くのお客さんが満足され「次もそうしよう」と



思っておられるのですから、それは結果が悪くない」ということでしょうか。ゴルフクラブに限らず、シューズなども、走っているところを映像でとらえ走り方の癖をみて「あなたはオーバードローション（※4）が大きいので、外側が固い方が良いのではないか」とか、そういった答えを即座に出すんです。ウオーキングシューズもそうですよ。足廻きを見て、インソールを貼ったり、削ったりして「こうしたらもっと歩くようになりますよ」とかね。そういったサービスを提供しています。

科学技術やデバイスが進歩して、センサーが昔より随分進歩しているのです。こういったカスタムメイドが進んでいるんですよ。まさに時代の変化がニーズ自体を生み出していると言ってもいいのかもしれないですね。

——そういったデータや計測器、センサーなどは自開発で？

それは高度なIT

技術を持つている会社との話し合いで「こういうものを作って欲しい」と注文をする場合もありますし、すでに一般販売しているものもありますね。これはこれで、その分野において独自の発展を上げているんですよ。

そういった意味では技術というのも面白いもので、思わぬところで「繋がり」というものが出てきます。例えば先ほどのゴルフの計測機を置いて打てば、真の暗なところでも飛距離や軌道などがすべて読み取れる。この技術の根本はGPSです。ミサイルの飛び方を検証するうえで捕捉する技術、それがこのような形で違った繋がりを発見しているんです。ゴルフ場でのプレーでも「あと何ヤードです」という計測をしますが、あれは皆さんよくご存じのGPS。GPSだって軍事的技術の転用ですからね。

——年々子供の体力が低下しているという報道をよく耳にしますが、それをカバーする用具の開発なども？

おっしゃる通り、文科省のデータでは年々下がっています。今は少し上がったが下がっているのですが、そういうことを我々も危惧し、改善に向けて活動をしています。子供たちの体力の低下の原因は、場がない、機会がないということが大きいように思えます。そこでそれをカバーするために考えたのが「ヘキサスロン」です。ヘキサ…ですの6種目ですね。いずれもミズノで開発をした基本的な動作を身に付けられる6種目でお子さんたちに楽しんでほしいながら「走る・投げる・跳ぶ」といった能力の向上を目指すというプログラム。体力の向上だけではなく、技術的なものを幼い間に体得していく…そういった意図もあるんです。

実際に学校に出向いて、指導をしながら体験してもらっています。お子さんの目の色が変わって行くのがよく分かります。気が付くと夢中になっている。そして自然と競い合うようになる。スポーツの原点をみている…そんな光景が展開されていくんです。まあ今は親子でのキャッチボールも出来ないそうですからね。親自身に経験がないよう

ちょっと深刻な問題だと思います。

——逆に高齢者層に関してはどうなんでしょうか？スポーツの観点から「生活上の安全」という部分のサポートも可能性はあるのでしょうか？

「安全」とまでは言いませんが、例えばお年寄り体力をつけたいと思っても、急激なトレーニングはかえって身体に良くないですよ。腹筋でも大きな負担がかからないものなど、その人にあったソフトな機器など、優しく、身体を傷めないようにトレーニングが出来るような器具も開発をしています。

またトレーニング以前に、身体を痛めた人をサポートする、あるいは傷めないように予防するものとして「腰部骨盤ベルト」などのサポーターも開発しています。（実物の腰部骨盤ベルトを示しながら）これは結構優れものなんです。昔れにちよつと腰を痛めましてね（笑）、ゴルフをするときにはこれを使っているんですよ。

今はこのサポーター系の商品は大変ニーズが高く、タクシー業界などでも注目されています。

——「楽しみ」という大きな分母があり、その上にトップアスリートから子供の教育、生活の安全といった派生がある…そういった水野様の基本的な考え方の背景に、例えば学生時代の経験などがあるのでしょうか？

結構長く生きていくからね（笑）。でも学生時代となると、中高大と身を置いて関西学院の校風は影響しているかもしれないですね。自由な雰囲気の中であまり過剰にアカデミックでもなく、スポーツに明け暮れた（笑）。そしてアメリカへの4年間の留学、日本の思考、パターンの違いを知ることは、衝撃的な経験であったとも言えるでしょう。例えば、宗教観ですね。日本人の宗教観というのは、よく言われる「無神論」とは違ふと思っんです。概してはありますが、さほど神の存在に対して深刻でもなく、また万物に「神様」がいるという発想も同時に持っている場合が多い…柔軟性が高いと言えるのかも



しれません。一方アメリカでは、これも立場によりけりですが、絶対的な存在としての「神」という意識は強い。理屈では分かっていたつもりでも、実際に話し合ってみるとそれを感じるケースが多く、大変印象的でした。

我々日本人は森羅万象に関して「科学に基づいて考える」という立場を重視します。もちろんアメリカでもそうなのですが、それとともに強い宗教観を共存させていることもあってか、論理の立て方や説得自身の考えのアピールの仕方が大変発達しているんです。起承転結は勿論、会議も会議法に則った形で進めていく……こういったことは学生の時から身に付けていくんですよ。日本の会議とはまったく異なりますね。なんといっても多民族の国ですから、民族の違い、考えの違い、そういったものと共存していく上での知恵なんですよ。

——日本の企業がCSRを意識するには随分時間がかかったような気がするのですが……これも日本の発想の違いだと言えるのでしょうか？

日本のCSRが遅れているという意識は私にはありません。ただ何か起きた時の罰則のあり方やマスメディアの反応が違っていただけだと思います。企業が「社会に対して安全なものを提供しなければいけない」とか、「社会貢献をしなければいけない」といった考え方は、日本の方が古くからあったのではないのでしょうか。だまして儲けようなんて発想は、日本の商人には無縁のものだったと思いますよ。

——水野様は、「大阪は今、経済面・精神面にどのような課題を抱えている」と感じておられますか？

タイカースが30年日本一になっていないというところでしょうか(笑)。皆が心の中に「東京に負けへんぞ」という気持ちと、「やっぱり負けな〜」という気持ち、両方を持っているわけです。どうして東京が一極集中の状態にあり、なんでも東京が主体。かつては大阪が「第二極」を作っているという状態だったのが、段々その差が歴然となってくる。すると名古屋などの都市が頭をもたげてきて、その他の都市と並列にみられるようになってきた。それが精神面にも影響しているところは大きいと思います。もっとプライドを持って「東京には勝たれへんけど、「一番目や〜」という思いをしっかりと持ち続けるべきでしょう。

と言いつつ我社としては、発祥は大阪ですが「大阪、大阪」という強い意識はないんです。大阪も世界の都市のひとつ……その意味では東京も大阪も同じですね。ただ、私の言葉はじょうしても大阪弁になつてしまふ。これはやはりはね(笑)。ただ、これが意識と言えは意識なのかもしれま

せん。日本国中で大阪の人間だけでしょ、どこに行っても自分の言葉を使い続けるのは、何かが生きていくのでしょね、私の中にも。

——これから大阪を舞台に活躍する可能性を持つ関西学院の学生に、一言いただけますでしょうか？

そうですね……関学生はミッシェンスクールの学生です。グローバルな視点、その素質をもった人が多い。スクールモットーも英語ですね。

ですので「大阪」も、たまたまの「場」であり、一つの出会いであるということを意識するべきではないでしょうか。そこにはたわるよりも、世界的な視野で仕事をしていく……そうすることが結局は「大阪」を良くしてゆくことにもつながっていくのだと思います。

——ありがとうございます。

水野 明人(みずの・あきと)氏

兵庫県出身

米イリノイ・ウエスレリアン大学経営学専攻 関西学院大学国際学部卒業
スポーツ用吸メーカ大手のミス、株式会社代表取締役社長。

編集後記

もっぱら「観念」側の私ですが、スポーツによって、感動・元氣・奮起・連帯など多様な感情を身えられます。ただ、インスピレーションからは、なによりも「楽しむこと」が一番の目的であると再認識しました。「負けへんぞ」という、大阪の「一番目のプライド」(笑)も大切にしたいですね。

編集室長 小島幸保(1995年法学部政治学専攻)

- ※1 WHAが2000年に公表、日常的に介護を必要とせず、自立した生活ができる生存期間のこと。
- ※2 中高年齢者のための世界規模の国際総合競技大会。4年ごとに開催。国際マスターズゲームズ協会(コペンハーゲン)が主催する。年齢以外には参加資格は設けられておらず誰でも参加できる。2021年には関西で開催予定。
- ※3 職人の技能、職人芸、技巧。
- ※4 ランニングなどで、着地の際に足首が内側に傾くこと。

2015年2月27日

場所：株式会社ミス大阪本社内にて

取材：中野順哉/白足